



はじめに

ユニセフは「子どもにやさしい学校」の活動を開発途上国と先進国の双方で行っています。「子どもにやさしい学校」とは、どんな“学校”なのでしょう。子どもの暮らす状況によって、例えば、今現在紛争が続くシリアと日本では状況が大いに異なります。こういう状況に柔軟に対応しながら行うのが、「子どもにやさしい学校」の事業です。この活動は、1989年に採択され、1990年に発効し、日本が1994年に批准した「児童の権利に関する条約（＝通称「子どもの権利条約」）」を具現化する活動になっています。今年2014年は、この条約が採択されて25周年、日本がこの条約を批准して20周年になる記念の年に当たります。この周年の年に日本で、この事業に取り組む意義を考えてみたいと思います。

何故「子どもにやさしい学校」なのか

地球環境的要因

21世紀の今日において私たちの暮らす地球は、色々な難題に直面しています。そうした難題として、気候変動による地球温暖化の問題と人口爆発の問題もあります。

地球の気温は、1980年から1999年の平均値を0°Cとし、このまま何もしていないでいると2100年には平均6.4°C上昇し、多くの生命が絶滅し、食糧生産にも多大な影響が出ると予測されています。こうした温暖化を食い止めるために地球全体で今すぐに取り組みを始めないと大変な事になります。

次に、人口爆発の問題があります。日本では少子化となり、人口はどんどん減少していますが、世界に目を転ずると、開発途上国ではどんどん人口が増え、2050年には世界全体で93億人ほどの人が暮らすようになると予測されています。しかし、これだけの人を地球が支えられないとの予測もなされています。

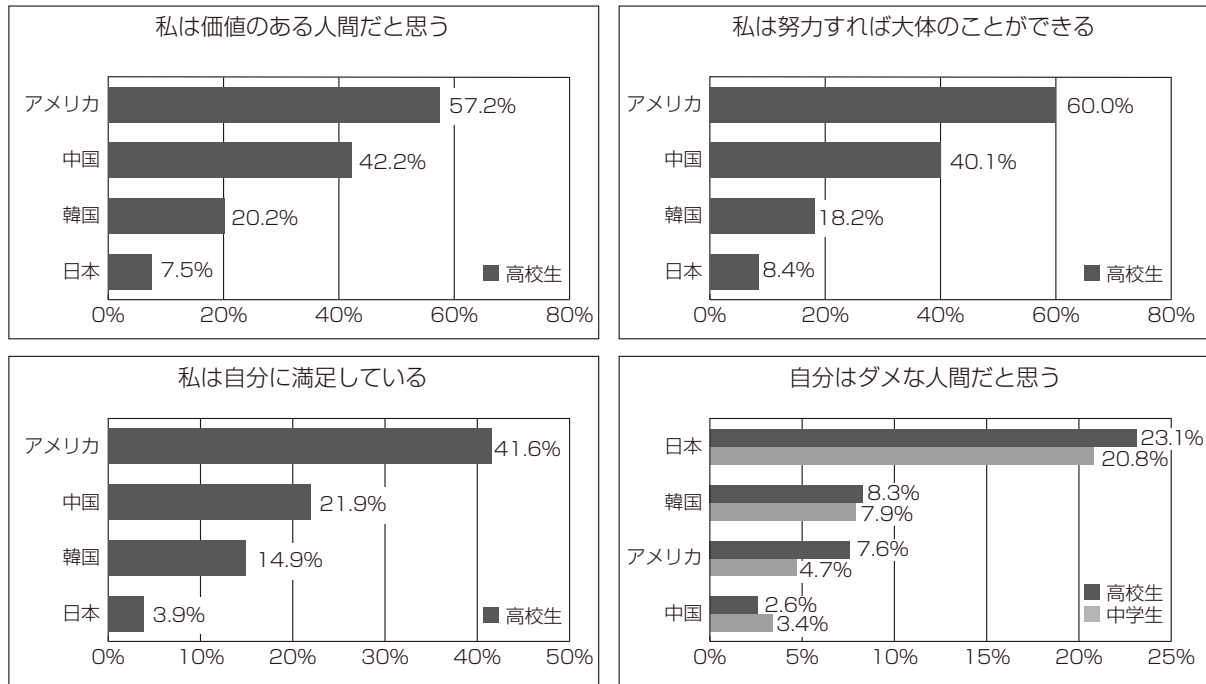
この2つの難問は、待ったなしの状況となっており、大人も子どももなく今すぐに世界が一つとなって取り組まなくてはいけない問題です。しかし、開発途上国では、今でも小学校にさえ行くことが出来ない子どもが5,700万人もいます。こうした子どもたちに教育の機会がなければ、温暖化や人口爆発の意味を理解せず、一緒に取り組もうとしても、参加する意欲は出て来にくいのです。その為に子どもにやさしい学校事業を展開し、子どもたちに学びの機会を持てらうのです。

子どもの自己肯定的要因

子どもにやさしい学校は、子どもの権利条約を具現化する活動です。子どもたちが、自律的に事に当たる事により、他者への配慮に発展していきます。子どもは権利を学習し、理解が深まると、自律的になり、他者も尊重するようになります。さて、図1に日本の子どもの状況が国際比較で示されています。「どうせ、お

れなんか、何をやっても駄目さ」「私がいたって、いなくなっても影響はない」などという自己否定の言葉が多く聞かれます。今の日本の子どもの自己肯定感の低さ、希望の低さは極めて象徴的な特徴であるとされています。子どもが自己肯定的になり、社会に関心を持ち、参画する事なしに社会の、地球の状況を変える事は出来ません。この傾向を変える試みとしても、「子どもにやさしい学校」の事業があります。

図1 日本の子どもたちの低い自己肯定感



財団法人日本青少年研究所が日本と諸外国を対象に行った中高生の意識調査の結果 2009年2月&2011年2月発表より

ユニセフの「子どもにやさしい学校」とは

ユニセフは子どもを学びの中心に据えた「子どもにやさしい学校」事業を世界の130程の国々で展開しており、開発途上国、先進国の両方で取り組まれています。この「子どもにやさしい学校」事業の基準を作るのに必要なことは、効果的な教育方法、健康的な環境、そして安全で包摂的な学校を作るために、親やコミュニティの積極的な関わり等です。「子どもにやさしい学校」を作るには、以下の基準を考慮に入れなければなりません。

「子どもにやさしい学校」の基本要素

1. 子どもの権利を尊重する学校となっている
2. 全ての子どもが対象となっている
3. 児童・生徒を中心に据えた教育や学習が実施されている
4. 男女平等、特に女子教育に配慮している
5. 教育の質が確保された学校を促進する
6. 子どもの生活に基づいた教育を促進している
7. 柔軟で多様性に対応している
8. 全ての子どもの機会の均等性を保障している
9. 精神的そして身体的な健康を促進している
10. お金がさほどかからず、そして近くにある
11. 動機づけられ適性を満たした教師がいる
12. 家庭との関係を大切にしている
13. 地域に根差している

さて、「子どもにやさしい学校」の“やさしい”とはどういう事でしょうか。これは、子どものみならずお年寄りにやさしい、女性にやさしい、障害のある方にやさしいと、置き換えて考えれば分かりやすいと思います。とすると、子どもにやさしいとは、守ってあげる、助けてあげる等、子どもを受け身で扱う事と捉えがちです。勿論、そうした面もあるでしょうが、やさしさとはそういう面にとどまりません。

子どもへのやさしさとは、子どもにも子どもなりの意見があり、子どもがそうした意見を表明する事が出来て初めて、子どもにやさしいと言えるのではないのでしょうか。それぞれの人の立場が正しく反映されて初めて、そういった人たちにやさしいと言えるのではないのでしょうか。言い換えると、子どもを守る等の対象とする権利の客体としてだけでなく、権利の主体として子どもを扱う事で初めて、子どもにやさしい状態が出来るのではないのでしょうか。

イギリスで取り組まれる「子どもにやさしい学校」の実践例

イギリスでは英国ユニセフ国内委員会が「子どもにやさしい学校」の事業を、「子どもの権利を大切にする学校 (Rights-respecting School)」^{注)} という事業名で実施し、2,500校を超える学校が参加しています。この事業に参加している学校に、参加理由を聞いたところ、子どもたちの生活態度と子どもたち同士の関係を改善するために参加したと答える学校がありました。この事業を開始するに当たってどういった点に留意したのか、また、履行に当たっての必要事項を記すと下記のようにになります。次に、この事業の実施でどういうインパクトがあったのか、この活動を実施する9校に聞いてみた結果も紹介致します。

■ 子どもの権利を尊重する学校を開始するにあたって

1. 事業の当該校で、経験豊富な教員をこの活動の責任者に任命する事が必要

中心となる経験豊富な教員が、子どもの権利を尊重する学校をつくるという長い道のりのしっかりとした計画をたてる事が肝要である。

2. 責任教師のもと学校全体がこの事業に参加するように呼びかける

教職員も子どもも全てが参加するようにする。
学校生活の全てにこの実践が適用されるようにする。

3. 既存の事業で既に子どもの人権と関わるものを取り上げる

全く新しい試みと思わせないように、すでに取り組まれている子どもの権利を尊重する実行をうまく工夫し、再計画し、限定した実行を拡大したものに組みなおす。

4. 最初から地域も含めた広範囲な事業とするのか、段階的に広げていくのかを決める

ある学校では英国ユニセフ国内委員会の専門家を招き、大々的な式典を挙行し、最初から全体で取り組んだ。

別の学校では少人数の関係者から始め、この実践の良さを周りに見てもらい、拡大していく。このどちらのアプローチを採用するのか決める必要がある。

5. 権利に配慮した表現を行う。

権利に配慮した表現や態度のモデルをつくり、権利を尊重する学校の展開に基本的なものとする。学校全体で権利を尊重する表現を使用し、全員が参加する実践を進める。

■ 履行の際の必要事項

1. この事業の明確なビジョンとリーダーシップの確立	5. 授業の中に取り込む
2. 児童・生徒の参加	6. 海外の子ども権利や英国の子どもの権利について考える
3. 子どもの権利に基づく学校運営を常に意識させる	7. 学校理事会やPTA の協力
4. 学校全体を巻き込む	8. 英国ユニセフ国内委員会の専門的アドバイス

■ この事業が与えた影響

英国での子どもの権利を大切にしたい学校運営を行っている9校でアンケートをとったところ、以下の結果が得られました。

学校運営への影響

子どもの権利に配慮した学校に向けた活動を行った結果、より団結して学校運営が行われるようになった。教職員は教室での子どもの権利を尊重するアプローチを長期的あるいはその日その日の授業に反映するように取り組んでいる。権利を意識する表現が作られ、学校生活の中で常に意識されるようになった。この権利を尊重する表現が教職員、子どもの双方に使われるようになる期待感がある。こうした権利を尊重する表現が子どもとの関係を良くし、教職員と子どもの上下関係を和らげていった。

学校での児童・生徒への影響

子どもの自己肯定感や態度、子ども同士あるいは子どもと教師の関係に大きな改善が見られ、いじめも大きく減少した。子どもたちは教職員が自分たちの事を大事にし、良く耳を傾けてくれ、そして子どもの幸せを気にかけてくれるようになったと感じたようだ。

子どもたちは学校がより安心な場所になったと感じている。これは権利に配慮した言葉使いや、大人からの子どもたちへの期待が反映したものである。また、意見の食い違いを解消する度量も大きくなったと子どもたちがしばしば口にするようになった。

そして、子どもたちは子どもの権利条約に関し理解するようになり、彼らの生活や他の子どもたちの生活にどのような意味を持つのか分かるようになった。さらに、自分たちとは異なる信仰や文化、信念への理解を深める事になった。

特別な支援やケアを必要とする子どもたちの成績が、子どもの権利に配慮した学校で顕著に向上し、こうした子どもたちが自信を持つ事に貢献した。

地球市民についての理解はこうした学校で大きく高まった。貧困の問題や、環境や社会の問題に関心が高まり、こうした状況への彼らの取り組みが彼らの周りの人たちに影響を与えるという事への意識がとても高くなった。

教職員への影響

教職員は、教職員と子どもとの関係、あるいは子どもと子どもの関係が良くなったことは大きな成果と感じている。また、教職員は同僚の教職員の姿勢や態度が良くなったと、感じている。声を荒げる事が少なく

なり、授業や学校での態度、給食、休み時間や課外活動の相談に真摯に対応するようになった。教職員は協力して仕事をこなすようになり、仕事をする上で、子どもの権利を配慮する学校運営に合うようになってきた。そして、子どもの権利を配慮した表現をするようになり、これが教職員や子どもの能力の向上につながった。

家庭・地域への影響

この実践により、親自身のあるいは彼らの子どもたちの権利をお互いにより良く理解するようになった。学校がリサイクル活動やフェア・トレードなどの権利に関連した活動に直接親を巻き込み、その結果、親も演劇上演の為に衣装の提供をするなどの協力をしてくれるようになった。自宅近くの介護施設などでボランティアをする子どもたちが増えた。

終わりに

子どもにやさしい... という、子どもの事だけに視点を奪われがちになりますが、大人の視点、姿勢、態度、矜持が問われている事に気をつけなければなりません。子どもは常に大人の判断の影響下にあるからです。この大人が、子どもにやさしい、つまり、子どもを権利の主体として扱う姿勢なくして、地球の危機に対応する事や子どもの自己肯定感を育む事は困難になります。

1992年の地球環境会議で、大統領や首相など各国の大人の発言よりも、注目を浴びたのは、当時12歳のセヴァン・ススキさんが警鐘を鳴らした発言である「どうやって直すのかわからないものを、壊し続けるのはもうやめてください」というものでした。この経験、教訓から我々は学ぶ必要があるのではないのでしょうか。自分の立ち位置をしっかりとわかった、地球市民を育て、その地球市民が連携していく事が肝要となるのです。その為には自己肯定感の高い子どもの育成が大切となります。この自己肯定感を育むために、子どもにやさしい学校運営が大きく貢献するのです。



写真提供：Carol Robinson 博士

注：UNICEF UK「Rights Respecting Schools Award: A good practice review」より作成